

鳥獣害対策の現場から(6)

リレー随筆

沖縄県のシロガシラ被害対策

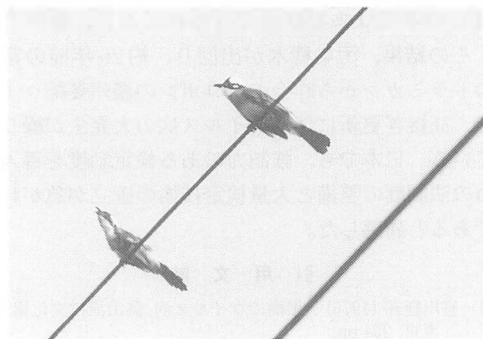
(沖縄県病害虫防除所 ほかまかずお 外間数男)

北風(ミーニシ)が吹き始めるころになると、どこからともなしに群れをなして現れ、農作物を食い荒らす鳥がいる。この鳥は春の訪れとともに去っていく(実際は分散し農耕地外へ)季節告げ鳥であるが、農家にとっては一級の害鳥である。一日にしてレタスやトマトを壊滅状態にしかねないほど深刻で悩ましい鳥である。頭頂部が白いことから、シロガシラ(台湾では白頭翁)と呼ばれる。

1 分布域の拡大

シロガシラは1976年1月に沖縄本島南端の糸満市で最初に見付かり、その後しだいに分布域を拡大し、最北端の国頭村では1998年5月に確認された。約90kmの分布拡大に22年を要している。陸上での分布拡大が遅々として進まないのに対し、那覇の西32kmの渡嘉敷島では97年3月、その北46kmの粟国島と北西53kmの久米島では同年5月には目撃されていることから、海上移動は比較的広域に行われていることがうかがわれる。

シロガシラがどのようなルートで沖縄に侵入し定着に至ったのかはいまだ明らかではない。南方から石垣島、宮古島を通る島伝いの移動については、先島諸島に分布していないことから否定的である。ただ石垣島にはヤエヤマシロガシラが分布しているが、沖縄本島で発生しているのとは亜種レベルで異なり、むしろ台湾に生息するタイワンシロガシラに近いらしい。人為的な持ち込みが想定されるが、同鳥を販売し、また過去に取り扱ったペットショップは県内に見当たらない。自然の分布域の拡大か持ち込みによるのか、その



電線上のシロガシラ

侵入・定着の過程は分からずじまいである。

2 防除対策への取り組み

シロガシラによる農作物の被害は、1981年ごろからトマトやサヤインゲン等の果菜類を中心に現れ、レタス、キャベツなどの葉菜類にも及んだ。最近ではミカンやパパイアなどの果樹類、キクやストレリチアなどの花き類、ジャガイモでも被害が出てきた。当初、農家ではかかしやビニール袋の吊り下げ、自動爆音機、ラゾーミサイル、花火鉄砲などあらゆる手だてを試みたが、急場のしぎにすぎなかった。1988年からは銃器による駆除が行われているが、被害の許容密度以下には落ちていない。

当所では1989年から防除試験が実施され、目玉風船や怪鳥風船、ディストレス・コール(DCコール)などの視聴覚刺激資材を用いて侵入防止を図ったが、効果は不十分であった。2cm目合いの防鳥網による防除対策は極めて効果的であった。

これらの過去の実績を踏まえ、1996年より鳥獣害防止システム実証事業がスタートし、2年目から担当することになった。しかし、鳥については全くの素人であり、なにぶんにもシロガシラそのものを注意深く見たことがなかったので、まず同鳥の行動を観察することから始めることにした。前担当者から生息場所や行動範囲を聞き取り、地図を頼りに林の中や農耕地を探し回ったが、なかなか巡り会うことができなかった。何度か通うにつれてシロガシラらしき姿を見ることができるようになった。ちょうど調査を開始した時期が繁殖期に当たり分散していて、またいつでも集団でいるとの誤解や双眼鏡による確認作業に手間取ったことも一因だったかもしれない。肉眼や鳴き声による識別ができるようになると、視界が急に開け、手に取るように見えるようになった。

姿を観察し始めて、興味深い行動を目にすることができた。夏の盛りに路上の水たまりで集団で戯れるところや、クロキの実の熟期(夏期)に数十羽が壮絶なる奪い合いを繰り返したり、飛翔中のセミや小型昆虫をキャッチする瞬間、樹上や電線上で巣離れした雛が親鳥から餌をもらおうと、ガジュマルの枝で雛同士が寄り添って夜を迎える様子など、見れば見るほど楽しくなるものであった。

同鳥に愛着を持ち始めてはきたが、農作物を荒らす害鳥でもあり、駆除も致し方ない。できれば共存共栄を図りつつ被害をくい止めることはできないものかと考え、防鳥ネットによる被害防止効果を検討した。その効果は高く、資材費も10a当たり7~8万円程度で



レタスの防鳥ネット被覆



トマトの被害果（未熟果でも加害）

済み、レタスの価格が良ければその年の償還も可能なことから、実証に移し普及拡大を図った。

2 cm 目合いの防鳥ネットの全面被覆でシロガシラの被害をくい止めることができたが、ときたま被覆が不完全であったり、解けたり、また土面とネット面が開いたりすると侵入され一苦労したものである。一度侵入すると、捕虫網を片手に施設内を右に左に動き回って大騒ぎしたものである。この経験からネット掛けした畑の角に鳥の誘導スペースを設け、ここに鳥を誘導する方法で侵入鳥を容易に捕獲することができた。この方法を生かし、簡易捕獲器をトマト畑に設置し、侵入鳥の1~2割程度を捕獲することができた。しかしレタスなどでは、トマトほど完全でなくても、よほどのことがないかぎり侵入することはない。トマトなど嗜好性の高いものでは、どんな対策を講じても侵入する場合があるため油断のならない鳥である。

また当所では磁気による行動かく乱や風車、DC コールなどによる侵入防止を所内のキンカン園や現地農家圃場で試みたが十分な効果は得られなかった。ただ電動作動式人形を圃場内に数個設置すると侵入防止の効果は高かった。

3 今後の取り組み

視聴覚刺激資材に対する鳥の慣れは必然的であるといわれ、また鳥から隔離栽培することも生産の維持・拡大を図るうえで障害になり、将来的な対策として密度抑制が重要になってくる。現在銃器による駆除が行われているが、農耕地が住宅地に近接し、施設栽培への破損や危険を伴うことからいつまでできるのか未知数である。捕獲器による捕獲も効果的ではあるが、自動化への目途が立たず、手動では効果が上がらない。シロガシラは農耕地周囲や公園の樹木に巣を作るが、比較的目立ちやすく、繁殖期もほぼ一定していることから、卵捕獲による密度抑制も可能ではと思われる。同鳥の分布域拡大により野生貴重種や生態系に対する影響も計り知れない。シロガシラを観察していると、密度抑制も忍びないことではあるが、農作物の被害や生態系のかく乱などを考えると抑制せざるを得ないものである。

シロガシラによる被害が偶数年度に多くなるとささやかれている。ちなみに今年（平成10年度）が偶数年度であり、また実際9年度に比べてレタスに対する加害発生の時期が早く、被害程度も高いことから、当たり年かと戦々恐々としている。

発行

日本植物防疫協会

作物病原菌研究技法の基礎

〈分離・培養・接種〉 大畑 貫一 他編

B5判 342頁 定価8,360円(本体7,962円+税) 送料340円

植物病理学の実験では病気の生態を熟知し、対象となる病気を思うように発病させることが重要です。本書は病原菌の分離・培養・保存・接種・発病調査法および薬剤の効果検定法を、第一線で活躍されている方々に執筆していただいた実験の手引書です。

ご購入は、直接本会「出版情報グループ」に申し込むか、お近くの書店でお取り寄せ下さい

(株)日本植物防疫協会 〒170-8484 東京都豊島区駒込1-43-11 Tel: (03)3944-1561 Fax: (03)3944-2103